

教室内で飼育可能な小動物を用いた教材化

○山中 詩織^A, 村上祐太^A, 土次愛美^A, 呉羽理恵^A, 青木怜奈^A, 志田紀裕^A, 松本一郎^A
YAMANAKA Shiori, MURAKAMI Yuta, TOTUGI Ayumi, KUREHA Rie, AOKI Reina, SHIDA Norihiro, MATSUMOTO
Ichiro
島根大学教育学部^A

【キーワード】 飼育教材, 小動物, 昆虫, 理科学習, 指導法

1 目的

平成 20 年度に改正された教育基本法では、「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」と教育の目標が示された。また、それを受けて改訂された生活科や理科の学習指導要領では、動物を長期的に飼育することや、教科の指導に役立てることが示された。子どもを取り巻く環境の変化により、子どもが自然や生物と触れ合う機会が減っていることから、学校内での飼育活動がますます重要視されるようになった。そのような現状の中、島根大学教育学部の初等理科ゼミでは、教育研究のテーマとして小動物の長期的な飼育活動を行っている。これは、生徒・児童への教育効果とともに教師と生徒の距離を縮め、学級活動や学校の活動をより良いものとする効果が期待される。

今回の発表では、島根大学教育学部の初等理科ゼミで大学生が実践している飼育活動の実際を紹介するとともに、多角的な視点から、また様々な生き物・動物・植物についての飼育上の方策についてまとめる。

2 初等理科ゼミでの飼育活動の実際

現在 8 割以上の小学校で飼育活動が行われているという報告がある (Benesse 2011)。しかし、ほとんどの場合、飼育舎での飼育が中心となり、子どもが動物と触れ合いにくい現状があることや、長期休業の際の世話など、飼育を取り巻く教育上の課題は多い。

本研究・活動では、小動物を教室で長期的に飼育し、子どもたちが、より「動物を飼育する」という実感を持ち、動物と触れ合うことができるような教材の開発や活動の提案を行う。また、様々な視点のうち理科的な視点に重点をおいた。

現在、飼育している主な小動物・昆虫は、うさぎ、ハムスター、ハリネズミ、めだか、ドジョウ、いもり、カブトムシ、クワガタム

シである。当ゼミではそれぞれの動物・昆虫ごとに主な飼育担当を決めて長期的な世話を行っている。

3 動物の成長を記録するという活動

青木 (2013) は、初等理科ゼミでの飼育活動の一環としてハムスターを用いてその教育効果と方法について提言した。それによると、動物の日々の世話を生徒・児童が共同で行うことにより、生徒・児童の「命の大切さの認識」を高める効果があるとともに、理科的には体重の変化や、日々の動物の観察・行動記録をとることにより、動物が成長していることこの「実感」を学ぶことにつながることを示した。

今回の報告は、青木 (2013) の成果を基礎に、新たに飼育・観察を行っているその他の動物についての飼育上の特性や実際の学校・教室内での教材としての可能性や効果についてまとめた。

参考文献

- 1) 中川美穂子 (2007) 小学校における動物活用の教育的効果とあり方支援システムについて. お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 4:53-65.
- 2) 日本獣医師会小動物臨床部会 (2007) 学校飼育動物委員会からの提言.
- 3) Benesse教育情報サイト
<http://benesse.jp/blog/20110324/p2.html>
- 4) 青木啓介 (2013) 小動物を用いた飼育教育教材の開発. 島根大学教育学部卒業研究 pp87.